

集団的達成の喜びを味わう音楽科の授業

— ウクレレを用いたミニマル・ミュージックの協働的創作活動を通して —

竹野 大輔¹

コロナ禍において、学校における教育活動は制限され、音楽科においても合唱やリコーダー、グループ活動等が従来通り行えなくなったことにより、特に「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」を十分に味わわせることができないでいた。そこで、ウクレレを用いたミニマル・ミュージックの協働的創作活動を通して、集団的達成の喜びを味わわせることを目指した授業に取り組み、その有効性を検証した。

はじめに

「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編」における音楽科の目標(第2学年及び第3学年)には、「学びに向かう力、人間性等」の涵養について「主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習に取り組み、音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽文化に親しむとともに、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、音楽に親しんでいく態度を養う。」と示されており、音楽活動の楽しさを体験させることは、音楽科の目標を達成するうえで、必要不可欠と考えられる。

昨今、新型コロナウイルス感染症の流行により、学校では授業における他者と関わる活動が制限され、音楽科でも合唱やリコーダー等の歌唱や器楽、グループでの創作等に係る表現活動が従来通りには行えなくなった。

西園は、音楽授業における楽しさについて、「音楽を認識したときの楽しさ」、「音楽の技能を習得したことによる楽しさ」、「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」(西園 2003 pp.143-145)の三つを示している中で、昨今のコロナ禍における筆者の音楽授業においては、特に「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」を十分に味わわせることができないでいた。

このような状況下、昨年度はリコーダーに代えて、比較的演奏が簡単なウクレレを2年生の授業(器楽)に取り入れたところ、生徒は興味を示し、意欲的に授業に取り組んでいた。そこで今年度は、3年生にウクレレを用いた創作活動を集団で行い、「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」を体験させることを計画した。

その際、音楽を構成する最小の旋律であるモチーフの反復という音楽的特徴を持つミニマル・ミュージックを創作・演奏し、更に発表する機会を設けることで、「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」の一つの具体と考えられる「集団的達成の喜び」を味わうことができる考えた。

研究の目的

ウクレレを用いたミニマル・ミュージックの協働的創作活動が、集団的達成の喜びを味わうために、有効に機能するかどうかを明らかにする。

研究の内容

1 理論の研究

(1) 他者とのかかわりによって生まれる楽しさ

西園は、「音楽は、演奏にしても創作にしても、また鑑賞にしてもペアでグループで学級全体でというように、他者とかかわりながらの活動となる。そして、こういった活動には、他者を想定し、他者との間に心の交流をしながら音楽を『楽しむ』という姿がある。」(西園 2003 p.145)と述べている。この楽しさは、コロナ禍においても保障すべきであると考えた。

(2) ウクレレについて

佐藤は、ウクレレはギターに比べて、弦の本数が少ないことやネックの幅がかなり細く、手の小さな生徒でも弦を押さえやすい弦楽器であり、弾き語りだけでなくソロ演奏、他楽器とのアンサンブルなど楽器としての多くの可能性があり、継続して学んでいくのにも大変魅力的な楽器であると述べている(佐藤 2016)。

また、ナイロン弦は、ウクレレ特有の優しい音色を出すことができるため心地よく、昨年度の授業においても生徒が興味・関心を持ちながら授業に取り組んでいた。昨年度末に行った授業評価では二人に一人が楽しかった学習活動にウクレレを挙げており、これらの理由から協働的創作活動の使用楽器としても適していると考えた。

(3) ミニマル・ミュージックについて

題材となるミニマル・ミュージックは、モチーフを何度も反復して進行していくことを特徴とする音楽である。テクスチュア(音の重なり)に着目しても、自分のモチーフと他のパートのモチーフがずれ、偶発的に音がぶつかったりリズムがずれたりしてミニマル・ミュージック特有の響きを味わうことができる。モ

1 秦野市立本町中学校 教諭

テーマの反復というシンプルな構造がゆえに、ウクレレで演奏表現する際の生徒の技術的負担も少ない。また、モチーフに焦点を当てて創意工夫ができ、表現の自由度が高かったり、グループ内で意見を出しやすかったりすることから協働的な創作活動を成功させる題材としてふさわしいと考えた。

さらに、集団的達成の喜びを味わう場として作品発表会を設定し、発表した作品に対して「おー」や「すごい」等の生徒の反応や評価があることで、生徒はできたという喜びや楽しさを感じることができる。併せて、生徒が発表した作品を教員が講評をしたり、そこに向かうまでの取組、生徒の思いや意図を持った創意工夫に対して価値付けを行ったりすることで、生徒の達成感をより高め、自信につなげていこうと考えた。

2 研究仮説

これらを踏まえ、次のように仮説を立てた。

ウクレレを用いたミニマル・ミュージックを協働的に創作することで、集団的達成の喜びを味わえるのではないかと考えた。

3 検証授業

(1) 概要

【期 間】令和4年9月26日(月)～10月18日(火)

【対 象】秦野市立本町中学校

第3学年6クラス(計239名)

【題材名】「ウクレレを使ってイメージを音で描写しミニマル・ミュージックをつくろう」

【授業者】筆者及び同校教諭(3クラスずつ担当)

表1 題材計画

時	学習内容
1	○ミニマル・ミュージックの理解 ・『DA・MA・SHI・E』(久石譲作曲)の鑑賞 ○ミニマル・ミュージックの創作体験 ・音の重なりでのズレ体験(鑑賞) ・創作エクササイズ① 開放弦、隣り合った2本の弦を使用 ・創作エクササイズ② 「花火」のイメージによる創作
2	モチーフ創作(個人) グループ創作(前半)
3	グループ創作(後半)
4	作品発表会

ウクレレについては、昨年度からこれまでに入門編ストローク(4時間)、初級編旋律(4時間)、中級編合奏(4時間)の学習を積み重ねてきた。

(2) 各時の概要

生徒の状況については、検証授業の映像及び授業で使用したワークシート等の記述から例として記載した。

ア 第1時

創作エクササイズを通して、ミニマル・ミュージックの構造を理解することを主なねらいとした。

『DA・MA・SHI・E』(久石譲作曲)の冒頭部分を鑑賞し、複数のモチーフが何度も反復されていることを生徒に気付かせ、反復の特徴について理解を促した。

また、ウクレレの開放弦を使った音の重なりでのズレ体験(表1)では、図1のモチーフ①とモチーフ②を二つのグループがそれぞれ演奏し、また残りのグループがそのズレ(反復する度に音の重なり方が異なる)を聴き取る(鑑賞すること)とした。そして、途中で演奏と鑑賞のグループを交代し、全生徒に双方を体験させた。



図1 ズレの響きを聴き取るモチーフ

創作エクササイズ①(表1)では、開放弦、隣り合った2本の弦のみを使用するという簡単に演奏できる条件を設定した。また、教員が模範例を生徒にいくつか提示し、創作のきっかけをつくった。さらに、モチーフを何度も繰り返して隣のペアと合わせることで、ミニマル・ミュージックの創作及び演奏を体験させた。

創作エクササイズ②(表1)では、「花火」というテーマからイメージを膨らませて創作する体験の場を設定し、生徒がよりモチーフ創作をやりやすくするためにコードC、4/4、1小節の条件を設定した。生徒は、花火のイメージをワークシートに言葉で記入し、創作したモチーフは記譜した。グループ内でイメージとモチーフを発表し、生徒一人ひとりの思いや意図の共有を図った。

イ 第2時

「秋」から連想するイメージから一人ひとりがモチーフを創り、持ち寄ったモチーフを重ねてグループでのミニマル・ミュージックを創作することを主なねらいとした。

はじめに、「秋」のイメージを各自で考え、各自がどのようなイメージで作品を創るかをグループで話し合わせた。そしてあるグループでは、「焼き芋、静か、切ない、紅葉、サンマ、コスモス」といったイメージが挙げられた。

次に、個々の「秋」からイメージしたものに基づいて、モチーフ創作(表1)を行わせた。

図2は、生徒Aが「風がヒューと吹いて紅葉が落ちるイメージ」を二分音符のリズムで表現して創作したものである。



図2 生徒Aの創作モチーフ

その次に、モチーフを持ち寄ってグループ創作前半(表1)を行った。モチーフについて、思いや意図をグループ内で一人ひとり発表し共有した後、全員で10回の反復演奏を行い、創作スタートのきっかけとした。

図3は生徒に提示した創作イメージ図である。例えば「食」では、食欲の秋から「好物を食べる気分がウキウキした感じ」を跳ねるリズムで表現するという具体を教員がウクレレを弾いて示し、創作に取り組みやすいようにした。



図3 「秋」のイメージによるグループ創作イメージウ 第3時

グループで構成やテクスチャ(音の重なり)を意識し、創意工夫しながらミニマル・ミュージックを創作することを主なねらいとした。

グループ創作後半(表1)で生徒Bは、「高い音を使って秋のすがすがしさを表した」とワークシートで述べていたが、グループでの話し合いで出た「冬に向かって涼しくなっていくよね」という意見を参考に修正した(図4)。その際、生徒Bは、「秋のすがすがしさや涼しさが入り混じる様子を、高い音と低い音を織り交ぜて表現し、中間の音を入れることで秋の風を涼しいなど思えるように工夫した」と述べていた。このように、個人で創作したモチーフを、話し合いなどの対話的な取組によって自己調整する場面も見られた。

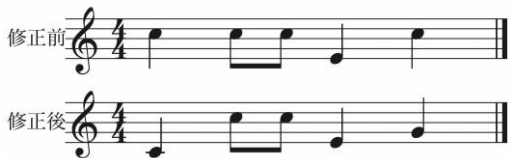


図4 生徒Bの創作モチーフ「涼しさ」

エ 第4時

グループで創作した作品の発表を通して、表現の楽しさを味わうことを主なねらいとした。

作品発表会(表1)は、1グループ5分程度の時間を確保し、①個人創作の思いや意図の説明、②個人創作モチーフの演奏、③グループ創作の思いや意図の説明、④作品の演奏、の順で行った。

(3) 結果と考察

研究仮説の検証については、次のア～ウの三つの視

点により行った。

ア ウクレレを用いた効果について

昨年度の生徒による授業評価やこれまでのウクレレを用いた授業(4時間×3題材)の実績から、生徒はウクレレを使うことについて肯定的に捉えていたと考えられる。このうち、前半の振り返りシートには、演奏が「難しい」と否定的な記述をしていた生徒が4名いたが、そのうち生徒Cと生徒Dは後半の振り返りシートに「楽しかった」、「上手く音を重ねることができた」と肯定的な振り返りを記述していた(表2)。なお、残りの2名も同様の記述をしている。

表2 振り返りシートの記述の抜粋

	第1時	第2時	第3時	第4時
生徒C	イメージしたことをウクレレで上手に表すのが難しくて大変だったけど、ペアの人と弾いたら達成感もあった良かった。	みんなで合わせて弾いて、それを聴くのが面白かった。	きれいにみんなでも合わせるのが楽しかった。	個人の創作したのを聞いた、他の班の聴くのが楽しかった。
生徒D	イメージしたものを音で形にするのが難しかった。	連想したものと音を合わせるのが難しい。	音がなるべくだんだんと重なっていくようにしていきたいと思った。	人数は少なかったけど、上手く音を重ねることができた。

本題材では、コードの固定と創作したモチーフの反復によってウクレレを演奏する生徒の技術的負担を限りなく減らし、創作活動に集中できるようにした。その結果、多くの生徒がウクレレを演奏することに負担を感じることなく、音を出しながら創作活動に意欲的に取り組むことができていた。

イ ミニマル・ミュージックの協働的創作について

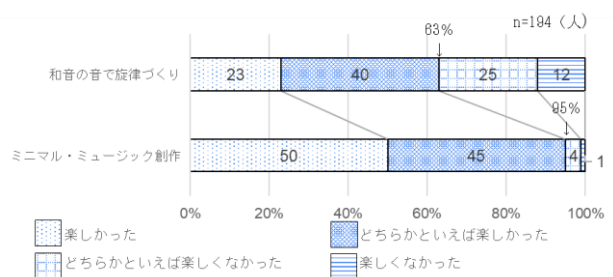


図5 創作題材の比較

図5は、昨年度のタブレットを用いて行った「和音の音で旋律づくり」(事前アンケート)と今回の「ミニマル・ミュージック創作」(事後アンケート)について、「楽しかったですか」と聞いた質問に対する回答結果である。

「楽しかった」と「どちらかといえば楽しかった」を合わせた肯定的な回答は、昨年度の「和音の音で旋律づくり」は63%、今回のミニマル・ミュージック創作は95%と今回の方が32ポイント高く、多くの生徒(95%)が本題材を楽しいと捉えていたことが分かった。

これらの理由には「他の人がお題に対して感じ取ったイメージを聞いたことと、グループの人が積極的に意見や相談などをしてくれたことがこの授業を通して一番楽しかった」、「同じ班の人と協力することで一つの曲になるところがおもしろく、楽しかったから」等の記述がみられ、ミニマル・ミュージックの協働的創作が、仲間との良好な関わり合いを生み出したと考えられる。

また、他の理由として「たくさんのモチーフによって構成されていて面白い」、「繰り返し聞こえる旋律の音の組み合わせを考えるのが楽しかった」等の記述も見られた。西園は、「音楽を表現する時に他者とのかわりの中で音楽のよさを共感し共有した時、『楽しさ』は変化し、深まる。これは、他者とのかわりが音楽の認識や技能に影響を与え、それが『楽しさ』をつくり強化することにつながったものといえる。」(西園 2003 p. 146)と述べている。これらのことから、生徒の中には、他者との関わりが音楽の認識に影響を与え、西園が述べる「音楽を認識したときの楽しさ」を体験できた者がいたと考えられる。

ウ 集団的達成の喜びを味わえたか

(7) 集団的活動の形成的評価

表3 仲間づくり調査票(下線は筆者による修正箇所)

問	質問事項	5因子分類
1	今日の課題を解決することができましたか。	A 課題達成の喜び
2	グループ(ペア)のみんで成し遂げたという満足感を味わうことができましたか。	
3	友達の意見に耳を傾けて協働することができましたか。	B 集団的創意(思考・判断)
4	課題の解決に向けて、積極的に意見を出し合うことができましたか。	
5	グループ(ペア)の友達を補助したり、助言したりして助けることができましたか。	C 集団の相互作用
6	グループ(ペア)の友達を褒めたり、励ましたりしましたか。	
7	グループ(ペア)が一つになったように感じましたか。	D 集団の人間関係
8	グループ(ペア)のみんに支えられているように感じましたか。	
9	今日取り組んだ協働的創作をグループ全員(ペア)で楽しむことができましたか。	E 集団活動への学習意欲
10	今日取り組んだ協働的創作をグループ全員(ペア)でもっとやってみたいと思いますか。	

仲間づくり調査票は、体育授業における社会性の育成、他者との交流という側面を焦点化し、体育授業で営まれる仲間との交流の機会を想定しながら、集団的・協働的なかかわり合い活動を評価するための信頼性、妥当性、および簡便性を満たすために小松崎らによって作成された。(小松崎他 2001)

この仲間づくり調査票は10項目からなり、課題達成の喜び(問1, 2)、集団的創意(思考・判断)(問3, 4)、集団の相互作用(問5, 6)、集団の人間関係(問7, 8)、集団活動への学習意欲(問9, 10)の五つの因子から構成されている。本研究では、質問項目を一部修正するとともに、毎時間の変容を詳細に把握するため、3件法を4件法(「はい(4点)」、「どちらかといえばはい(3点)」、「どちらかといえばいいえ(2点)」、「い

いえ(1点)」)にして活用することとした。

図6は、各因子及び全体の平均を、時間ごとにグラフで示したものである。

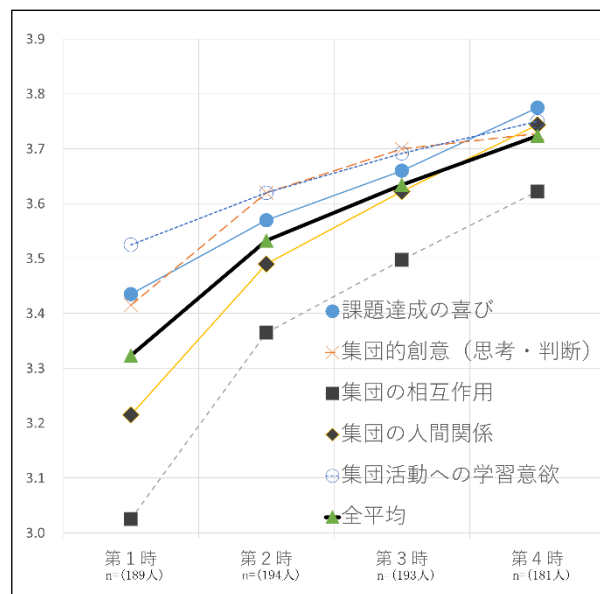


図6 集団的活動の形成的評価

どの因子も第4時の作品発表会に向けて右肩上がりの上昇が見られた。個からペア、そしてグループへとつながりを広げながら、仲間意識が向上し、グループでの一体感が醸成され、第4時の作品発表会が本題材のクライマックスとなり、集団的達成の喜びを味わえたと考えられる。

時系列に見ていくと、オリエンテーションを含む第1時は、教員による説明が多く、集団による活動も少なかったため、評価は最も低くなっている。

第2時は、前時に比べ評価が高くなっている。振り返りシートを見てみると、「合わせることで一体感を感じた」、「1人では生まれぬ発想も、みんなで作業すれば吸収できる」などが記載されていた。明確な課題のもと、他者との関わりが多くなる活動を取り入れたことが影響していると考えられる。

第3時の振り返り記述には「音を合わせる時に頭の拍をもっとうまく揃えたらきれいになるかなと思った。」、「6人で合わせてみて1人で弾いていた時は単調に聞こえた音も合わせることで立体的になって自分の音も1人で弾くより美しくなった」等、話合いの意見も深まるにつれてどのグループも積極的にグループ創作に取り組む姿が見られるようになってきた。モチーフを修正し、作品をより良くするために取り組む生徒の姿も見られた。

第4時の作品発表会では「おー」や「すごい」と声上がり、その反応に嬉しそうな表情をする生徒も出てきた。生徒同士の反応や相互に評価し、それによって認めてもらった嬉しさや満足感を得ることにつながることができたと考えられる。

(イ) 振り返りシートの記述の分析

a 他者とのかかわりによって生まれる楽しさ

授業の振り返りの際には、楽しいと感じた場面を、毎時間振り返りシートに書かせることとした。その中で、他者との関わりが楽しいと感じた場面の記述には、表4に示したものがあつた。

表4 他者との関わりが楽しいと感じた記述例

- ・みんなのモチーフを合わせた時
- ・アドバイスされた時
- ・強弱や速度を変えるタイミングを試している時
- ・意見を出していってどんどんよくなっていく時

図7は、他者との関わりが楽しいと記述した人数を時間ごとに表したグラフである。

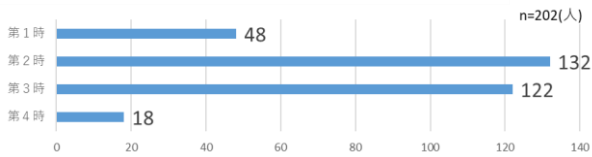


図7 他者との関わりが楽しいと記述した人数

第2時・3時は、他者と関わる時間が多かったこともあり、多くの生徒が「他者との関わりが楽しかった」と記述しており、教員の説明を聞く時間が多く、他者との関わりが少なかった第1時は、同記述が少ない結果となったと考えられる。また第4時に関しても、5分間の発表は他者と関わる活動であったが、他グループの発表を聞く活動が多くを占めたことから、同記述は少なくなったものと考えられる。

そして、いずれかの時間に同記述をした生徒をカウントしてみると、180/202名(89%)であった。

このことから、今回の授業では、多くの生徒が「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」を経験でき、集団的達成の喜びを味わうことにつながったと考えられる。

一方で、毎時間の振り返りシートには「ミニマル・ミュージックはたくさんのモチーフによって構成されていておもしろい」や「繰り返し聞こえる旋律の音の組み合わせを考えるのが楽しかった」等の記述があつた。これらは、生徒が音楽を形づくっている要素を認識して「秋」のイメージを創作したことによる楽しさであり、イメージと音楽を構成する音楽を形づくっている要素を関連させて表現したことによって得られる楽しさであると捉えられる。そして、このように記載した生徒は、前述した「音楽を認識した時の楽しさ」(西園 2003 pp.143-145)を経験できたと考えられる。そこで、いずれかの時間に1回以上「音楽を認識した時の楽しさ」に係る記述をした生徒をカウントしてみると、72/202名(36%)であった。このことは、今回の授業は、「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」を経験できるとともに、「音楽を認識した時の楽しさ」も経験できる可能性があると考えられる。

(ウ) 事後アンケートによる生徒が味わった達成感

図8は、第4時の授業終了後に「グループ創作を通して、達成感を味わえたか」という事後アンケートの質問に対する回答結果である。

その回答では、肯定的な回答が80%あつた(図8)。その場面として「曲が完成した時」、「発表した時」等を挙げていた。4時間計画の中で、作品発表会を本題材のクライマックスと設定し、そこに向けて生徒が個の創作やグループ創作を積み重ねてきたことによって集団的達成の喜びを味わえたものと考えられる。

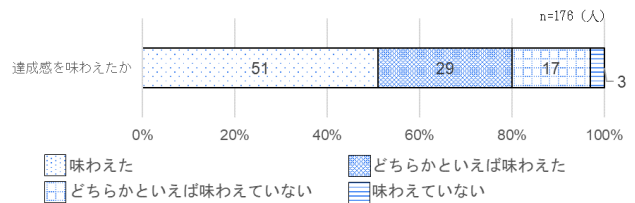


図8 授業後のグループ創作を通して、達成感を味わったと回答した人数

(イ) 事後インタビューの分析

第4時の授業終了後、各クラス2~4名、合計20名の生徒に対しインタビューを実施した。対象とした生徒については、話し合いへの積極性や創作の技能等が偏らないように配慮した。

インタビュー項目は三つ設定したが、その中の一つ「グループ創作の授業を受けてどのように思ったか」という質問に対する回答では、1名を除く19名が他者の存在を語りながら、「楽しかった」、「面白かった」等の肯定的な回答をした。

表5は20名の回答(映像の記録)を文字に起こし、整理したものである。

表5 インタビューの回答抜粋

質問	グループ創作の授業を受けてどう思ったか。
生徒E	まず最初に思うのは、楽しかったです。仲間と班の人と関わって、秋のイメージは違うけど全員で合わせてぴったりと合った時の感じが楽しかったし、仲間と意見交換できて、自分も意見を出すことができ、相手も自分のことをわかってもらえるという嬉しさもあって楽しかったです。
生徒F	秋って一つのテーマだったんですけど、速さとか大きさに印象が変わるんだなって思いました。

生徒Eは、下線部のように他者と関わることで得られる楽しさがある記述をしている。

生徒Fは、他者との関わりについては語らなかったが、「速さとか大きさに印象が変わるんだなって思いました」と認識が深まったととれる感想を述べていた。また、生徒Fの他にも、認識が深まったととれる感想を述べていたものが1名いた。

このように、インタビューの結果からも、生徒は「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」を経験でき、集団的達成の喜びを味わえたと考えられる。

研究のまとめ

1 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

本研究の目的は、集団的達成の喜びを味わうためのウクレレを用いたミニマル・ミュージックの協働的創作活動の有効性を明らかにすることであり、検証の結果、その有効性が認められた。

また、仲間の存在が、音楽(ミニマル・ミュージックの特性)への認識を促進し、「音楽を認識したときの楽しさ」につながる可能性も示唆された。

今回は、集団に焦点を当てた研究であったが、その前提として、個々の生徒が集団内で活躍でき、責任を負う課題の設定が機能したと考えられる。つまり、個の活動の延長線上に集団での活動を設定し、一人ひとりの思いや意図を大切にすることが、傍観者を生み出さず、集団的達成の喜びにつながったと考えられる。

また、作品発表会は、本題材の最終目標となるとともに、これまでの活動の集大成となり、集団的達成の喜びを味わう場になった。

主体的・協働的な学習に取り組み、達成感を得た経験は、次への学び、生徒が更に音楽と主体的に関わることに繋がる。そして、音楽科の目標でもある、音楽文化に親しむとともに、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、音楽に親しんでいく態度を養うことに繋がると考えられる。

(2) 研究の課題

個人でのモチーフ創りの段階で、生徒への課題は拍子を4/4、和音をコードCに設定した。本来ミニマル・ミュージックは、和音を固定したりモチーフの長さを限定したりせず、モチーフのズレによって偶発的に音が重なることを特徴とする様式である。検証授業では、ウクレレの演奏難易度を下げ、モチーフの創作に集中して取り組みやすいように和音と拍子を設定した。4時間の題材計画ではこれが限界であったと考える。

一方で、ミニマル・ミュージックの特徴であるズレを味わうためには、モチーフ創りの段階から様々な拍子を混在させることも考えられた。生徒がそれぞれ拍子を選択したり、グループで話し合いながら拍子を工夫したりするまでに至らなかったことが今回の課題と考える。題材計画を5～6時間に設定することでゆとりをもってグループの話し合いの時間を確保することができ、よりミニマル・ミュージックの特徴を生かした創作活動ができるのではないだろうか。

(3) 提案

これらの成果と課題等を踏まえ、ミニマル・ミュージックの協働的創作活動を通して、集団的達成の喜びを味わう授業をつくるために、次の四つのポイントを提案する。

- ア 個々の生徒が活躍できる集団における課題の設定(傍観者を出さないための工夫)
- イ 明確な目標設定とクライマックスの演出
- ウ 授業時数の確保(できれば6時間)
- エ 記譜や演奏など、創作活動以外の生徒の負担を軽くすること

おわりに

最後に、秦野市立本町中学校の生徒、教職員を始め、本研究にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

【指導担当者】

ブライエル山口 菜見子² 林 俊晴³ 三田 利昭³

引用文献

- 文部科学省 2018 「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編」教育芸術社 p.66
- 西園芳信 2003 「音楽の授業における楽しさとは」日本学校音楽教育実践学会編 『学校音楽教育実践シリーズ音楽の授業における楽しさの仕組み』株式会社音楽之友社
- 佐藤雄紀 2016 「高等学校の音楽Iにおけるウクレレ指導についての一考察-授業実践と事前事後アンケート調査を基に教育楽器としての可能性を探る-」(玉川大学芸術学部研究紀要, 2016, 7巻)
- 小松崎敏, 米村耕平, 三宅健司, 長谷川悦示, 高橋健夫, 2001 「体育授業における児童の集団的・協力的活動を評価する形成的評価票の作成」(スポーツ教育学研究, 2001, 21巻, No2, p59)

参考文献

- 西園芳信, 衛藤晶子, 松本絵美子, 下出美智子, 山本富士子, 2001 「音楽の授業における楽しさとは-共に学ぶ楽しさの次元と広がり-」(学校音楽教育研究, 2001, 5巻)
- 中村美雪・上休場宏幸 2015 「だれもが主体的に参加できる構成活動(音楽づくり・創作)の授業-(第3年次)-オノマトペによる「声の音楽」をつくる-(生成の原理による授業開発プロジェクト-仮説生成模擬授業を通して)-」(学校音楽教育研究, 2015, 19巻, p. 84-89)
- 中井隆司, 横山裕美子, 山崎絵里 2011 「集団的達成課題による児童の社会性についての学びの検証-「集団シンクロ跳び箱」による小学校体育実践から-」(奈良教育大学紀要, 人文・社会科学60巻1号, p147)